

## 感動系ラボを目指して

中道 範人<sup>✉</sup>

名古屋大学 大学院生命農学研究科

2021年の4月から名古屋大大学院生命農学研究科にて研究室を主宰することとなりました。主に植物のシロイヌナズナを実験材料として、概日時計に関わる研究をしています。

2021年3月までは、名古屋大学トランスフォーマティブ生命分子研究所(Institute of Transformative Bio-Molecules, ITbM)で研究していましたので、移動といっても距離は50メートルほどで、引っ越しも大変楽でした。ITbMでは研究環境の変革も狙っており、1つのオフィス空間に異なる研究分野の学生やスタッフが混在するシステム(ミックスラボ)で、1オフィスに80人ほどが居ました。そこから移動し、教員1、技術員1、学生1の合計3名のラボから立ち上げていますので、人数の変化がもたらす研究スタイルの変化に対応しているところです。3名で研究を進めてきたのですが、超優秀な学生さんと超優秀な技術員さんのおかげで、大変有意義な発見もできており、良いスタートとなったと感じています。近いうちに、どこかでその成果を紹介できたら幸いです。今回の研究室便りでは、この1年で研究に対して感じていることをお伝えしたいです。あくまで主観なので、この時点で中道がそう思っている、という感覚で、お見守りください。

「どちらが感動する？」

少ない人数で研究をすることで、貴重なことにも気づかされました。その1つが、研究や実験の取捨選択です。少人数ですと、考えついた実験の全てを並行してできることは少ないです。したがって、その場面では優先順位をしっかりとつけることが大事になるかと思えます。その際、どれを優先するのかに、はっきりとした指針ができました。2択の場合で、両方とも上手くいったらと仮定し、その成功のどちらが「より感動するか？」です。もちろん、感動とは個人的な主観ですので、一人一人で価値が変わるとは思いますが、実際に取り組んでいる人間がそれを決めることが大事です。この1年、色々な選択肢や優先を迫られる場

面がありましたが、この判断基準は、とても良いものだ確信しています。自分の決断であれば、誰しも懸命にやるものです。また例えその選択がよくなかった(あるいは間違いだった)としても、その選択をする場面ではよく考えていたはずなので、なぜあの選択をしたのか、検証することができます。また選択した時点での自分たちの知識不足・想像の欠落もわかり、その失敗は記憶に残ります。結果としては、失敗も成長の糧になると感じます。

「やってみたい！をサポートする」

子供は、面白そうな事なら何でもやってみたります。また挑戦して、成功すると、それが自信になります。僕自身、それほど目標は大きくはなかったですが、学生時代には指導教官からは、やりたいことを自由にさせてもらっていましたし、それに上手くいくと調子にのりましたし。それを踏まえて..

学生「この前相談していた実験ですけど、予想通りの結果がでました」

中道「すごいね！やっぱりそうだったの？」

学生「それを踏まえて、その次の計画を進めていますから。」

中道「素晴らしい！じゃんじゃんやってください。」

学生「僕は褒められて伸びるタイプなので」

中道「いいよ～、じゃんじゃん褒めますよ～。もう卒業だけど、学生君、この研究で、もうひと花咲かせてよ。」

学生「はい。もうひと花咲かせてみたいとおもいます！」

学生「この前予想外の結果がでていた実験の解釈  
なのですが..」

中道「ペンディングになっていたやつね。僕はノー  
アイデアだけど？」

学生「XXX という論文をヒントに、YYY という可  
能性があると思ひ..」

中道「それで？」

学生「その検証をしてみたところ、私の仮説通りで  
した。したがって、以前たてていた仮定は棄  
却されて、こちらの展開を考えた方がいいと  
思ひます。」

中道「凄いじゃん！その方針で進めてよ。頑張って  
ね！期待しています！」

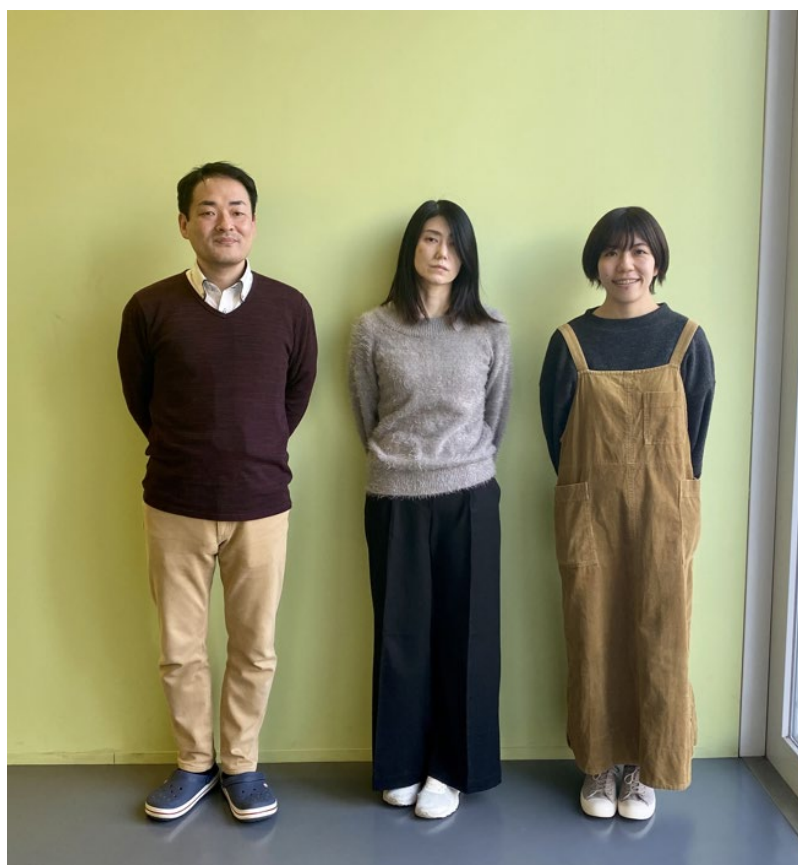
学生「はい、頑張ります！期待してください！」

上のようなことを常々、研究室で体現したいと思っ  
ていました。この1年、一緒に研究している学生さん

には、「自分のやってみたいことには、躊躇なく挑戦  
してください」と伝えてきました。名古屋大では、ラ  
ボ間の交流を促す取り組みがありますが、そのサポー  
トを利用しつつ、その学生さんは、学内の計算科学系  
のラボでの共同研究を進めました。その結果として、  
新たな時計調節化合物の作用メカニズムが、計算科学  
の観点から明らかになりました。さらに、彼女自身の  
IT スキルと知識が格段に進歩したことも大きな収穫  
で、すでに異なる2つの分野（植物、計算科学）で専  
門性を身につけつつあります。計算科学の知識や経験  
を、植物研究に適用させようとしている姿から、新た  
な視点で植物時計にかくされた謎を解明してくれる  
だろうと期待しています。

このことを研究室の新人配属セミナーで紹介した  
ところ、「枠に入らず、いろいろ挑戦したいので、配  
属したい」という学生さんが多くいました。今後も、  
縁があつて配属した学生さんの背中を、色々な形で押  
し続けていきたいです。

最後になりましたが、研究室だよりの執筆のお声か  
けをくださり、また作成にお力添えくださいました名  
古屋大の大川妙子先生に感謝いたします。



2022 年度のメンバー